山路乃露

甚廿五才の冬までのこと
これハかれ光源氏の御素まれたまひしだけとこそきこえし
御おもりのことしるされバ、それつゞきあひてこそいと
かきはつかしけれど、ゆめくさをよく侍らず。
さびれをみて星人に、いづれおもひおりしおもしろし。
あるてかまへの御名しれをしらうけるべの、ゆめれ
やうかゝれ中の哀れに悲びがたくおぼしかゝまりしはある
されく筆のすさみに書きとゞめ侍るぞかし人心にもさそ
人には心もさぶらひけんど、りそめあそかる振びのまゝにて。
めしさへもられくぬまりれバ、おぼえちかき人のこれも未練
ちからんとて、ましは筆にまかせあつめけるぞ、そぞろごとど
もこれうり出そぞやうのことにすぎをけるつみでは。

これとゞけおほまのさく所あるみしもなけれ
ども。もていかゝんとくらひわらふ人のもり来吹けれ
ところどころの。きあてあしきまのうしとさけうま
やおもんかれ。（浮舟くらす）なうれかりしくげろふのもり来。ほのま
（葉ノ）こさつけのそし後は。いかなりしこゝにぞとれ心あり
うらぬおりかゝて。おりしせう（浮舟ノ弟小君）とみなるをば。手（習ち）後も
さびくつゝしきされど。うぢ、おかしき夜まうね（く）
しくそのこゝろりまいれば。中（葉ん）くれ心のこゝろぶれまて。
（むかし）昔いまさ夜ぐくさつゝれ学しつゞらまゝに抱衣や。
（大ゐくす）こおほい君とちかれめかしず。かくさひちあさきて。
おりくかくづくるかりもりしをさうまともと人もうち

ゆかしのふひまおはちんとのどかなるまちわびかし
は。おんなぐさみにも見てしるべしされば。世をかくれて
も長からずとぞきこゆ。人の世はまぼろし。なかれはかなり
ずはえみまほしさま。いふしずうおもひよそへられて。（浮を大志二）
あさましかりしくちをしき候。さりながらそれのところゆかし
をりをりのありしなどいひと思ひしう思ひし出そうまも。
ねぞおやしれ心や。いましまゐらせ候ぞこそまつて思ひ
らんとぞ我心ちすごしおやまくはさひきつれのふと候ゆへ
ざ候はさうしきげなれど。我はうまはんびくすゝきなるき
まなしつる年月はいふかひなきさくまて。さてあら
れつるとぞくまつけては夢かつるとも思ひあり

ざらんかぎりもれいづる心まかせのすへば、みづゆきて
とはきんとしら紙おほせて。かみさ由のれまれいとあく日
まぞ。あまりのふかさいかにこそかけまさるぞ見えて。女（三）文
のれ方ま（葉）かりのすへれば、そこざれれぞみ。ちまけんいる乃
こうちきこちぞ。ある夜めくしうさあしめて。そこひかし
のすへられさ夜ひとめでこうれぐしれまさふかすぢちく。
ちぎひさかうこうさそそれそきさめちぞ。うつくしうこそ
なかまも。それそられりし人（ほ）へ。けぢりくあいりやうりき
こかうるハ。まかりてきへさうひ出られのふかくちぞきうろま
うつくりしも。そざやかしつらんさ夜こちぞ。うぞも
比ハされのさ心まかりのすへバ我ちがくうしとさひしかりハ

いかに娘はえんとおやしれば。もしもりおさくいおいる
あさましれもひの。心もずちりし一かしこそ。いかにぞや
心をさゞめくうちひそり給しが。おやちくきしうを御
ひしおもれいかれめにもひさましがくこそ給さす
がさ御くはつけて。人をこのかはもむりしらさひ
そこはし心の程ぢけがましさきや。ひと川ゆりの
ありがたく。おぼしのふ家の人へは。れさ御ことちるか
むつびはそ。かれもされめりしのくれだる月のそ
おもくはがくこはをもくあくちりまきりのくれだ
されこむりしがりは我かしのかとは。おかしくぞ
ありざはおしずげ。ざやうちり。うとぢちぐさむくく

なくむかしを忘れぬまでは。なまれげりしか
まへなおまげもなぞかなんと。おも成こりずまには
心まくこきおくりをば。さりげなくてかしこげすこのあ
ありくあれど。尤だもすて山まのこおぼし路つて。けん人だし
ありまげなるぬうるともも。まがうき世なりかりと
おぼせるは。地ぢうおやまくなりまや。うへいまるすぐるは
しるくるやしきれくきそふとまおんうしとの
まはれうあちくをこなひは心入て。年へうる尼ぜん
ふらはもやくうちまきりて。わうきうこの心とられを
もはかとりきりのへれば。れきるべこきれしとはこそと。尼ぜん
もいとゞおぼまれまし思えて。僧都のなりのへるまが

くちびのうへハ。ぐちりうちびるかづらそ。いとおり
がらう地しのふことそ。おね茂のれおり夜ハづう
なきはうしげわびぶまあれ男しまはしらう
てまつるま。さばりおきりしぬれ心ざしま。ぶれた
ばしらるま。女の身まは。くひおばぞれ心りあすまぞ
出さなんと。おいあうさのひあげられもべるなり。
れ心ふぶれ給ハざるう。いとめでふされ事なり。三世
の諸仏もいうまおそれ三給ふんちびぶとくあく
の給ちすま。いともぞうだくまむりひねのへ
れ夜りくおりしげまそちをりるてまやいし
おすんべこされ身うまと。おまぶちびはまことあいお

やめいそびのきゝし涙ぐまれ候。いまはもじめう
されやうに。されこそむさぼられ候りず。すゞきうし
御めれうきもしあづしの風はさえもて。夜のう
られ玉おしそれんのこずゞしうおぼしめすまも。
今さら里のありべきとも思ひしられ候。秋ふかくなり
まつは風のをと月のひかりもひとしほ哀をそへて。
ねざめの夜はさらでだに物思ひがちなる候。まして虫
の声さへくおもしのをとうまで恋まさりまゐれ候。
ゆめ候むすびんかね母にあさきまゝに。さりながら
おふとおぼへり中にも。おきふしのみぞ人あさくまゐ
よそのへりしおやまも。そのひあらう地とのこおもく

れかはらせ男して、そのづから心もめべかりしことぞ
こよしもおもとそれくありまし。いまはせひあひ
たんとかれつさせずなりしうおば母かくてこそあり
かれと、風のつそてまもしこうれそてまつらんハ。かとあさ
まうしうらみかなんべうさらし人はさんのこりあつくこうれ
さてまつりぬるぞ。をあてものうされおふべくことかう
んとつとロおしう。さらべかあづくりける命のさうしは
母君はいま一夜あひこまのしもうおばしあづくて、れけ
山道まうらるれつるひまもなし出こえんことハつまし
うて。いとつてやらんことれ葉も覚えずばくれ
てのことそぐし給。さかハもじめよりけ子ハこと乃心

しりくめりせ。などり母君よ侍るしざうんなどお
やしうちばつゝましき。犬ねの君。日比すゞしもげしひ
始けりを。母宮なども覚しさ侍ぞて。などか抱さ侍らし
うりけりあぶれよ。うしろれとも相ばつなくて。日比
よ姫ぬ。萬ゑらくされいのりのまさしうや。などなるゝす
なくてなくうりなぬれど。紅なずゞりちやましさ
歳まよつけなてぞ。ぐゝよもれおりゐなどいしら給へ
むぞ。のどやゝなるひゝつゝく。紙れゝよなどめふしなへ
ま。紅ゆゝりのまうしハ萬れり。あゝめしよきて。などやま
しうしうか行いハ。人めしげりむつゝしうて。ぱと涙しも
られば。ゆといふを紀よも。ぐいの歳ゑれよりすゞくよか

けはひ夜ぶかきもうちしらしてそのへりをもとめばいと
しをりいひなんとて文給ひけり小君もや
めでいそぎたれども日たけてをかれば山かげ
ちかきあたり猶まぞもりつかぬらんかしこは例のおほかる
所々あなづらめしき猶あらんはおほせなん人さ
ておまへよりかねでさへめでたくゆかれば尼君もおひらけ
にて猶まゐらんとおぼろげならずて許させ給ひけるへしと
くしたべきさんはもせまゐらせざらぬさればいとし
ちかきわたりしたまひてはうち抱きしておぼえ給へるいと
すぐりておさまりしうたかめはおもひぬれつきなき
やうどかはいつかもいとやうしとおぼしけりまして尼君はいへ

例のごとくまとゐをせられば。お（小君）かへ出て。すのこの

もとつどへつゐたり。尼君ゐざり出て。殿（尼君詞）とうち山

をはけなかれあらしなくてやと。なつめしきさし

すぎ心ぼうとうぐくもしつくおもひみえてし侍らいら

あさましかられはもとえ立られ給りんとも侍らはずへ

しうおぼしみあれがたくてまうり出づるひ侍りと

のみへ。ば（小君詞）げさびさびしくあかれくへりあさくてもいくへり

まいりましりあん。うけと夜がり侍りつるといふ程

も。つらくつけあり。おまえ君まめやかなるこころ

あしきて。（浮舟）あどけなげあかなで。めききあきしにあなが

あ給。あ（浮舟）徒いとつくまいられど。我心まとげれ

かうまでこゝろ猿猴にてへつらはれなくて。母
君などこそ猿なれば。親にかうかりへぞそりとさひ猿
りんもうとくうしこゝろ。さるゝんさればほのめして
むやとやふおりくあれば。く親にもおもいでおはへり。
ふえと ゆへば宮にまもとて。せねのあまるびき入て。へくも
きくべりくれぬれば。小ゑん いとうれしうて。まづ文さしそへ
てこゝろもいとさびやうにおりしげなうさ夜。世う
しなびられかまへげ。家がありくたぬ抱らし。れく
なぞのおりしまもあらぬをこゝろに。ゆめかなきり
ぞとよろしくそ。なくとねるうらうり浮ん妃君も打まぎすれ
つかせうしのことぞ今更見しまうされて。まげ母君

のり来ともまはしけれどうちおぼゆべきことの葉も
おぼしたどりつゝもひめて。猶も世にあるよし知らで
ありつるしを。誰もくさそれさへ絶えぬをあててうへさま
の契りや。さらひのかゝはあづまへて。おもぬ世の心ちし
てこそありしつれ。そのづしく心ちもさづかるゝは
きへて。まづ母君のいとゞおもん。おぼつかなうくるしきを
のかひもやうぬは。いひあはしくるしうて。おりしまちず嫁
よし後へ。そ代れ歎は心もづひ。おもやうくこえ給し
を。お物語よりさ後ぐあづくさめあてまろあどしまで
も。やどおしうきせ給。れ心ざしのさうじけあさそれ
あぐさめて。けらずめさりとこそつれはの給めりし。

されど枕ばけておりし人にもあらずぞおぼえ侍ふ
かりそめてまつりしおりや、やがてもとのえまほし
う覚えしを、大将殿ぞしいひ人にまかすれど、夜々の
給しかば、えさらぬ侍らぬなど、おされげにいひおくり
されたるに口おしくなりけても、さられなんど
かみ紙にかきて召給けるにも心うきさにおもひざりき
けうさ殿にも覚えおはしてよきのすへにいとうくしと
おぼへり、うづうく紀さ殿にまでも、母君にいま一たび
あひ見てまつらんとおもふにそれぞあびてつたへてよ
とて、其のそでより文をとり出てましせきのへ、
小君かとおぼひきいで、おりつる涙ながして、いかにの

給はらん。ふじ一ふくりまても給りて、入り給はんと
いへば。いとうれて弄月の程はせひかくり給はん事。
うけがりうき君をおしぬき夜はいひあしてむてつく
さんとは也給ちずやとうゝゝれて。ちあてもえいれ
ざゝしめたりざし、まとずしちなは心ともちきされ
ほんざやうちれど。おきちくよりうりつきひ。ひとつ
まてありしちぎりむつましさはや。られはづは
せかゝとすゝしつけのへるかと哀や。ゝひいまし
てかへり給はんちぎり例のさゝしすきんも、いとゞうしかれ
ば。尾花もげはいつでさひあれぬかんざまもれかゝまま
ひめべきさ出石のゝけぢはぬめうぜ。ゝひがりいゝひ

孫志のえうとりひ出すゐくれど、いそぎ来るべくの給
つゐには、うぐとまりハ侍べき。月の光よとなごじくし
くるまじくちるんとそてとうぞ。さもおかすけてとうつく
しうあへう、秋かけめべき心あうけるゆゑやなひくるね
どもあはどくきくれば、いとこれをしけや、夜中うらすずる
ほどるまいりつきこれば、れりどもこれさくれまかり。
こよひいさふぶ出ちんとも人ぞ、いづくへもりとりけるぞ、
あどく、我をのられんもゐろしけれうちてゐるくあど
男して、こそ、母君まもいとらめどらうくも心ゐてが
どめくんもこよきゞかや、いるまゝ倒しとさいなづくへ
で、どりうちくるゐ。人どの声あまうして、いと

ぢうおりてうけあるを。御ぶすまくんとやうかねを
あすく火まえ出て。蛇もこぢくこりこぐげちやうのき
りりとえて。いたいをかれバおさまりそて。おしくる
こゝろせころまとのねはさかしふ地ぶも。つまのごこゝ
ぬそでけらぬびつて。いそぎあけころま。あぜにはさられ
ふろとひへバ。此地いこちあつけるを書きまれてはかる
あんころあされゆりつといふ。されどもろひあしころふ
らひ夏やふろとのこだころれおさ出て。ゆゝちくとく
来りおへる地されどいふも。つとめしとしへり。げ発ち
しとこつけて。来りおかへどのむまでうる後のせ
とちゃけうさしびこぢくこり。犬もえもさりて。おやし

かくれども。はいまはかゝぬる人風吹さそひて。此歌
とばかりければ。そのくめづらかなることのみて。る
へいまで語るども。うらうらりつれども。猶なく
みえらまりて。世中さびしげなりて。これまでちらま
なごして。名ごりなくしめやかなるに。蓋 志はあけり
宮のおはしこゝに。御愛になさ出てこぬふとて。うれ
ちゝハ日(め)まさくうり。夜半(よべ)ハふかきまでこそ御しが。引
猶まゐしつかぞとのゝへバ。小左衛門 おりつゝあそばれにまいり
つかとこそも。蓋向 いつかぞれいのかなるいづまさなるゝ
んとぞよそ。うひちけれとのゝよもり。小左衛門 さしも
おとめさ庭(はノ)にさらへなるしてまとて。まとまう

しとやかにかへりつる人のかたまけ・哀に心ぐるしう
おぼされてなごりおほかれば・つねにかくれな
からんもあれゆくへしらずのてはあるまじきを
つきせぬ御なげき・日比(花心)にまさりてもの思ひ給し
よなれど・たゞひとりゐ給ふなげきにてはおもはず
すゞろめづらしきおぼしまどふもおもふせなまし
なり給にければ・さ人とゞめおくおもひなきそてとゆかしき
うちまゝしげやか(花詞)なしとてひとつ給(小花詞)ふあり
あはれなるいとまなる涙のかきつせまほしけれ
いかばかりさ・(花心)いと哀なる給・(詞)さてそれぞれあらん
ん文はとのあへば・(小花)みえず・あはれ給ふべきみなと

きゞやうばうしまれさうらふべきなれどもおやしうあれ
あはれや。まして地の心ゆかしくれば、おけて詞とて、
よろこぬ人のおもしろやうなるあはれ。秋なかばなど
うくかへしなんとゆへあつきてさぶおりしるべし
のをあれば、筆のもりがるもまたひけり稍あらく
こころそ、すこしつきされぐて
いとひいとふて命のこえやしでかくらび
おなじうき世をぞふる
まよひせし心のやみをはらさばまことされ
しづまぬうれしくてどもあるはるのうらじう
かなしとぞうらみのかへるゝ袖の紫さしろ

ちかきまであんないのぐとおもひけりそのひるもよ
りつしあつうこうしまてものはふくあれと
このみやくるれきしきうじうあためしくなしのふ
をこれ小宰相子もめでくしとうちまもりこそく
つくりおぼしあつかひ浮ノあつさ魔にあたり
のへはおしいうあいしとやへり薫ノあはなし
さふやうあんあかいまけふあすもそぞてつくへさ
まべこうしとのこまひてともへりぞいとうろぐし
さやうありともこひしのびてものちんとやふ
をその心まうけしてゆふけるまいれとのまへ
じぶ小宰相いる浮ノおぼさんとかくしたれどさまえこそし

きせど。うけ給はりて いそでぬ。これぬれば。いうじ
うゑびやけしき女車の給はりておりすべし。
山たかゝりて それ馬にはのりうつり給ひぬ。きりだきり
うちこめて。みちいとあやしくされども。おもしろき
ころとおぼえて。いそぎけるあひだ。なにはあ
やしく。いまはそのくひあるましく候とおぼしを
どもの。おのがし世に着がくりそふらふ。かくてあゆみ給
まかりしうり。これいそがるゝれ心ちするなんどいさう、
もろともの あはしは。月ながめありあかすなん
のがりて。千里のかりまでおもひやる心ち
すかりけり。いかゞおぼしのこすこともあらじかし。

山ふかくなりまてはいとあげりつる峰のけしき
じれば、いづんいとやつしけれど、さすがにつきづ
しく、これかれの宿ちらしふ庵どもおほくしくこゝちあ
小督 しらは山のふもとはいとさびやかなる所なり
なり、まづ見れば小督しらしら紙いれて、おりふしはこゝろすみて
河 ふるきの門こゝろくときさして待つ見えけのふ
きそゑるこしまこ所はかゝちち志侍めり。
うづいるせのへ、人げもし侍らざりとこゝろえあれど、
素河 ちばしとゝなくてとのかて、我ひとり入かふら
ぢといふ所をなかくしなしかなも、おなじ
ことなれど、いとあるくうつゝ庵あり。つまどとも

わきて、ぶつでんのきざはしやとおもひければ、さげ
まうせんざいのまへよりつゞきて、新ちゝき
ときこえしずの影をくひろごりぬる下に、ぶちうつれ
あまこのへば、ぶちあるくハ佛の御前なるべし。ぶやう
ぢうのうちにきこゆるくわうり出て、ぶこのちく
つるほぞこぼるゝ人おほかりや。經のまきさへそうく
すとも、志のびやうにあるしくさきて、志めぐ
とまれ哀あるにおほきことおほくやがて御洞すむ心
ちりて、ぬく〳〵とこねあへるほどにちわりて。
そこあるひとそめるほどや、いうじの月のひかりやと。
ひかりじちてそぞぶれのつゆすゞしおけりく。

月のかげをはぐくとおぼめかうくもかりぬ。
音なづしのおもげなど荒しきれて。からじうお
られなるはこの人ぐ。月はのかりなくさし入るは。
まびまうぞめるぐまや。袖ぼあふしうこて。ひ
さいごこのゆくくとそゞきけれさう。まこのまる
まいらじうな夜めしうおうしげまて。うらかしる
こそらくうげさ。まさりて。老びごうまありおまへ
渚よ。おのほどげかまなごめ入へ

浮
さゝぬ雲ゐの月のかげのさやけしはよる
秋はうつしぞめらん。じ志のびやかりひらう
ぶちて。おすらぶぐうゝさ夜。いゞしうあまれ

あるよ。あめ人もされこいえちづめ給はずやおかどそん
ふるさの月は涙にくもれてそのよおもかげの
みかげはこぼりきとてかとよりのぼるに。いとおほし
ふくだけ抱るばいかん抱にそてともしつけく
てむくざ彼によき入なふ。袖をひきよせ給まへ。
せち紙とめぐらされらしきをさすがされとこちられなふ
いふともづしうつおもしく覚しつひこすしむしつけ
こう抱るしばいうばいきん。世にある抱ともこられなり給
さしそいうきことにひつうでおもしざりなり
ところある紙されてまつしんとこ彼なうに
おもしまされつるそのかれがくしおもしはされなり

ゆうぜんとして泪のこぼれ出て紙まま
あはれなる儀也。うきもつらきもいづれなきもじ
のこりつゝく絶ん。ふじおへなくこらえしつゝ心
の内へ中にいかゞきこえなりしをほどへて後。
あやしきなる後まよへるもこゝろしまぶど心を
こぼれあうらて。ゆうめぐる世のこゝりまさなし
志賀一ちくの歌だちなりまて。おしあへ毎夕の雲とも
あまあしいはよそふかうくのちぎりもありしよ。
今一しほのふかくてさしまなずふましき心ちな
んもしと。文義のやうなることもなぶんへまあり
し後はぶうそくこともおんとゞこ後くしつ後よ。

妻らう夏はまだひつゝ。おぞすらおりありあんやさ
のこおげさすずしつる心のうち浅ぐてらしを
いぞで営しこてしざん。ごひねおくがれ出家山
尼の峯けこ候。俳神もおもれこ給けりや。思
のほりまかぎらりもこそこしめりは。さひちさい乃
ちのちりこへけりも。いまちんうれしきもだ。そ
べてまの○ぶべくもおしずの給づくりは。さ浮ん沈が
衣とこそなみしもあれど。ひ出んしくあすて。
しうちもさのへる夜。おはとろまらうこげや。
慧さうちやいとりくおぼしまでこ家なすんけう
こと哉。そしまりもひきうし男あれども。ふ

この文は。こし志る人におしへざりけると。我の
こかもひとつしてはおもうしことをそふるや
おんとの跡ようなるしもちのことをそうしう
すあかみ紙。うきく（淫ん）がいうじうもづしうそ。いと
どいふべきことの葉もおぼし。翁ども。おまりおぼ
川がおんしも。おやしうりめべかれず
（浮）うかべてわかまもおかぬうつせばうぞそれまく
の夏はあしてよ消のゝまあざうつしうるも。音（芸ん）はかも
らずちうし。苗おもひあらうちうしみや。おうし
よりもこてあしようい心よくわびあまりあくう
心ちしてひしの人（大）はもれようおぼしうかれと

こゝろはいとゞしきれ心うちちらうしなひける
のまよひぐるしやしき我が門にて後もしらずて
ゆめはあさんこゝそおろまじかれとて
まよひ出てもみづからこそあらしかれまゝやう
ふし髪はあすべきげいと心ふかく聞ばし入
ておもしのまよひおぼえりしおぼへるれ共をすゝし
物さひしさん人をおもされこそすずやうをわくゞ
うしなはれ心をうむしまうしんめちうしされ
悪ひぐうおそれあるまゐ我あしざれん人をと
いとゝうきめと信教のいよゝもまぢうしうと
おぼしつゞれどうちへぢまうう給ずさ得らく

よりゐ給て。つきをめでともなうしうちしひ給ふて。
執かゝれし夜かんつきをめべきなどか今一さび
まちかねき夜までおもひえんとハ思ひきうけりとゝらす
おひきうごうし給も。くらしとれにこそのかたてぞ
されむひひよ峯の松。嵐よ簾のをのひゞきそへつる
ほどし。すゞろくこゝろはさされてまれがおもしきけり。
あまがみらか庵の草むすぶハ家のこひしとこそきこて。
もとこそ月ハ秋なりわくがたなる虫のこゑなど
よりあつめ哀をけるしる所のさ夜なりけり。
世のうきのあれなる中のものおのづから色おほく哀も
ふかひぬべきを此世よはいかで多なるべきさぶ

うすはなぞめしおもかげをぬぎそれとなく
あひむすひのへるあられをいかであはれめせん
まるうかみしあしびきのやまのこゝろにかゝる
紺の白ひぢせのものともおぼしめさる月乃
ひかりに影をうつしあぐましきあまあらしく
こしの小女もさてそのへさきより給ひければたかくかゝる
うしく心かくくしひ給ひぬあれはあれちかま
ごゝろざしのうちませぬどもし給ふめど人に
ものぞみがくれてすゝし衣もまつさり
あんのし例の姿めいうさしすがたハ旅衣のう
ちゃうけうのかれに海をいつまでこのまし給ふ

かゝけりけるとだにもやつり給てしことこそ今更口おし
しられねどいひて、こちことのよそうれけるうしほそ
めそのぞきけきばつまどれきよひきてかおそらす
ありさしめすきれすそぞろほのゝまことを、いさし
うきんなりれさ夜られ、いまやうの人かゝうきつもおしみ
御名をもやまもふきけれそしきそなどめでまどふも心
づきなし、吹もぞぐられどい風などはましてうきそ
此世のかゝの心ちしそまれ給のさいおへうもんぶん
のゝほりも、今こそおやしうれなど心もそゝして、おもひ
すがしうしれもしまゝ思ひてすゝつ、いまやそのまゝ
まそしそ、おりすべうあれ、おきましきれに友のかりさか

まことやちまたにさゝめくもえしらぬやみに心ちすは
いやうく明がたちかくなりすれバ蛛絲たまんと
ていはくう心ゆかずおぼしむすぼれたまへりしが
君のみこゝろはさらせどもわすれられむしまうく
なりゆくはすゝみし心あれバうらうしもあはれそひ
て後ことしあらむつひまでもおぼつかなき絶まき
こしまほにもつきまいらせばかり世だになれまいらぬ我ばかう河ろれ
をこえこえんぞうしの山里ハ家のおゆもし世の里
あはれなれしとぞうらし後ハちとの名をさへうそ
ちてこそおもしろけりけれあはしきてみしがさて
もはつくつきの空だちう心づくしなることまだ見まほ

られざりつる秋かきつる世にしほれんそでのかゞ
がおぼしまけんとて

蕙
さやれ山路の露にそほちつゝ又まけ候へるある
月の袖とうれへかへる哀さともおもはざりけんや

倖
露わけし山路をまけぬ人ぞさも秋はあはれひの袖
ぞさはりて。蕙羽さりやあさはりにもの思ひすくれ。まめや
くま見えさせ候へき。今は招つたへかるべしまで
あらしをわかうてそあるべきぞ、このほどではしくは
くしめ相まいそぎ出給ひつゝしやりしうつりのかれなるそ
ひもつまじうる夜めしくおりしげまで露けきにあはれ村
とまけ出給はん夜はさすが哀とこあんりし。つとめてハ

人〴〵のうちとけざる夜はかなりけんとは
まさしめぐりてうりおもへらし西のうつりがちなどせ
めでゆきざつて猶かれし夜だに夜おもしれまで
ひまこそおもひとりこなれなど、さててとくもち
いひあへるもおもはしなれど、このへぐまなき紙
いとつきせずめでしかなることまめでさても見れさ夜
あれば、ましてなまだかりのことものきこむこの中将
とのゝ山ざとのひろまさあへるこゝろどもてまは、お
とろかおどろきてめで哭そうもとりあかくも
し。姫君はあまとみてましき心ちして。いとゞさ
やうまのこまかざらうしておもへきまい。ろうしりけ文

御のところにも給りなば、尼君のよくしく、これ
さ候はれとて、ひそかにそうせし給ひしかばの
ちからもすくなかりけり
さちちへり程こそまじくなかりし夜の義ところ
まさ候しられつけさはいとゞ心もほれまうと候ふ。
らじ帝しさせんかとちかん。今はもの義をことは
若しもかべきれさ候は、程つさをぬれそしてそ、中
中心ぶきようしずと、淫うちつけはれ女こそしえん、それ
いとつましうて、若しもうけめをおまぼいと思ぐ
まちそされとはあん、かづらまあやかちうさ候はこさ
う、給めりなかりて、すこしちやうかあも抱ばしが

むねじくとりをいひきかせられてうちな
きこえけれは文のたまはりて
そのまゝに文紙玉の前にそ字かきて
かれがまをすかとこゝろしひまはさてはらつゝま
ちこなる心には、おそれはのこ相はしいて、さ後なる
うこれはとて打つけまいらせしめさうらうこの
文をうけるもいかはぞやこれさ後はよくいひきゝん文
いとひきんありうきやうのあしゝぞあらんものは
めはつねかきありあんとおもひいさて後はかなる
まづさいりしこ行やうのつまぐの心だらせは昔もけ
ましうかあらずこゝしをちかひえりいば後はありし

文ぞつかはすとてうろびまよへどもてさはぐん程
人もあまりこゝろもとなしとせうそこしけれども
なふかれ右近といひし人ぞうちども猶なくこゝろい
のうちまよひてなればれあけさほれつゝおやさきさに
うろへてさけりとこそおもてて哀と思しつゝ心がへなど
もおとされくしくうりしまかれをとこゝをさしのひ
られば志のびてまいらすべくの給りさてこゝめおなど
川うちしられば(たき)わらうじうちびてまいりけり
ぞいそてなしありさまをとらしまうらひあれ
さうへばまもこよなうしねば慈きこめやさし
もしおぼしかりかれ地夕がほの右近はなつかしさくもと

の絵しれさしいへどもたゞ心もとなげなりしを、それは
いとうやうやまでよくうるはしくしてさやうのことまつ
きちんずぞおめりそれはも此義のやうなることを記
たゞそれをもこゝや絵もかぎりけりなど人々あげうれ
経なれば、いまぞめしよせてまかなはれどもの絵出
かゝるほどく人の心ちなまくいとなみとへんぜ、おほされ
かきさ後いとこしもちなり、紙もれいなりしこと
も心えがたくおぼゆかもしめいでひさすしおもきま
志きさ物のこゝちしゞおやまき後かて
こうけそこしうけつ人いふよしぬころぞや
うのまみしきつちあん、そら後もうちさそて久し

くちやに語りけるかどいふあれば学へる事にさもあり
なんとせさせ給ふ時は此母が許への消息には我と
せといひ語りかばこのかたはらにすゝめさ海まこゝろ
ればいとあはれけるにようよ心えがたきこれを汝乃お
やさ海こけん人してはいろもなおなすかるゝあるべ
それとのおんばあまりめよりほしきせしやうすまいぐわ
さゆふねそのこあさきなていろじう抱を学しつ
さ海くもおさねなていは後の世のつとめこゝろあるべき
そこちひを志なていかさ海まして力をうしおかれん
とあさき語おりくゆかしおともちあくことあしさき
なしてし後いぶうるゝぶひあくわのそさつ

入ゐてかりとこそハ今までもおもひ侍りつれ。
らみれらこん事も母ようさつけゐへりしことなども
いまはと世におぼしありけるとなんきこえ侍し
といありけつれことまうとひて。うぢじうあく。
浮舟ノ母と云く　遠詞
はくせ山いいうまもひまどいん。おまり心とさめ
ざりん猶。いと物さげうしうらん。げみいとおふ
小宰
あそしぬさ母まてれど。おもしまもゆうさて
うれやうくもしくいひちすまじう。うち
がくめてぞもあへきひさりふとやつづく世
まわつことい(う)くれあげあつれ。おまく入まりなく。
白
こやあまくさつけゐて。ことどもいでてきあは

いまいとゞさびしさもまさりぬべきことゞもと
のゝふやうでう侍ひのき入させつゝいそぎのり
て出ればこれかどすゞしやかなりすゞ侍はあやし
とゞめておもてうしろのあんとさへしめへといへど
入てさふらんといふはあやまちなくしきへめ
いておもひしぬことかきくへといへどうち
とけうるへぬ出のうてあれめうけし
いとゞまれぐしうちぬこうちありてうごもつては
おもろ侍あり思ひけれ侍はいはまいておりし
うろまさころうゐめまごさるげりまありまさりなにゝまの
あれ大将殿よろづにつくしゆうりをおぼしりぐずゆへ

まへるは心ぢしどころてまつはつけてもおもひは
しうばかりには心のどかにてこそ客ましけれ
とぞかはつきまずあらじさててうちあけば。かくこそ
ば客のれうへりぬれどろげまかりげあるさく男むし
ほどしよもすぶるかれ兆んぐこそどころびせおかる
心かけれど。ききてさせんとつけてもぞそれはど
おのひつをれてまうりすぎ侍るびんぶらはらさき
さ隻よけいしおへ。これわらでこ姫君のれゆかりは
をあてのれおきけりけさせぬかとこそまふれば。
うぢかりこそのれひかりあくつべしとやさときて
しとめ。めでたけるく侍り。まして、おきせまし給ふ。

いふまじく口おしくおもひ給へらる。ちか頃ま
つかうまつりなれ侍れば○までもおりし人と
をおぼしめしけることそやんごとなけれど、いひか
らしてさうめり。此ごろこのくいへば、おほかれげま
でもおもふさくせよとすべし。おりつる人どもどうく
りられなどしてぞつらしめやうなありぬかりち
くねようて悪てさきてさすべきことゆうてまつり
めつといふる。何事なりんとゆちたらまへだ。ま
づうられ抛はちんをいさめさつてさきんとてちん。
こ夜うちられことの心いはこ恋しそてさつこし給いめと
いへば、いてやおてのいかんこといはちかぐしつこど

いはれてうちゆるして。ちかづきしとせへるかしこさ
まで此文こそ出てこそまいれば。おやもとていそざお
けるれども。うけ人ゞ人のせひよろべきこととまある
ればかならず心もえずまゐりねるまゐらする筆
の跡ものこまで切まゐらす。ずそれところしめす
心ちぞやさまことへん。こにいかかとくまうと
とられかしぬれば。せつらとくかしこてくおぼ
しまどりん様ごん人もあやまりこそてもおしからせ
あん。きりげなくむさげめのへと。さてきすべくの
給りをつれば。うくまいり給りつかとど更ぐつく
らへられてどれ心まどひをしげめてあそおが

まづ、さてもこれはゆめかあるぞとおぼされまどん
御きぬいとこそりや、ちうしめりのこどもゝ、おぼされ
されどもいふひあすらずうりあるをば、いふしう
ましうてさし流どひつきとされらう、まう世
まことおりすあれば、いまいとでうこ村のまどるとるく
さず、さ世らんと、もとこうれ給もことりや、されども
ちうさ給まもゆしざあり、いづくとあくそまいうる
もいられさせ給あげ、ひとこもさびめて、影のごとこて
給んずらん。ふおもと覚しのどめて、御のちつをまう
でおぼつりあしめて、おぼさてげりまおうしまさあ
んはあるべきと、いへば心ともおしずかうちずげさるゝ。

今はそのほどの心もとなさ紙には。かゝずべうもんとて
なきがらのこゝめり、おつる涙はとめしげや。よしおなじさま
ながらは。まかなしれとなしこゝろなれど。はうる
あてかはすぢといはせよもん。でいろとあるさいやめ
さあれば。大将殿（慧）の御ばしうる涙の御気色などまうで
ありしりたもしたまどひなやまし。みしくもらべし。う
つれはさしがりしこのなとも乙まうあるまずありひさゝ
まんさもん。せうしうきを世語ながら。はきちんはかしうるべき
と。思ひく珍重（ちぶうりさき）てまうりぬれば。（浮ノ母）いひてあらくさまんべきこともゞさ
なさるまつるば子（小君）そのこまつりして。（浮ノ母狗）相学しさん涙
くらしくうれ。大将殿（慧）をいかゞおばしうるとせん

む。なまめかれ敵のおさなきまれの給とくにちかけれバ。
ましてさびしき地党しろあん。まづこころそまかう
ぎりつかれ袖もひきちぎらず。いとどうらみ給しこそ。
めもあやなるよしがれまへのつしろびかよはいたし
なかなかまかりてこころもわかなげ。おされここちのまま
のきていへバ。さてくとゆすがは打ちまれあずるぞ
れは流けてもひなさき歳にあり給はけりぞ。ものく
いとく口物しともげもざしすぐ心つめれども。ちけ
きりはらへぞやまひづきて。色よし喪の代ちりあて
ありてしを。今もずしあらへましかずとも。我はこ
いづれをとがいひしまては。御覧までのこし。へざらは

もいひさして。よひよりうらんとばかりさて。おつ
月ハまづこゝろでいそぎ出かゝりしこそハ。例のあら
べのまくらをまつ入て。うくとこゝもれバ。心さへぞつらき
ぎんろあすくて。まづうちあされ給。おまへさるひぐ
きうほんぢやうまで。さうべき家とふくひきてはく
ろひちどして入給ふり。姫ぎみも又ひるまきすゞめ
あれど。おがやまなれぞまて。まふりうへさまで。
いとうさて海うき涙袖のぬるれ。ましてうらいつ
りしこゝけきもし給てん。人のれ心のうちぞひやら
ませいさじれとて打あるき給。けるいりぞりまとと
さふまさしまつて。えをやすみ給りぬぞ。おまゝら

心づきなきさやうなや。人をも語らんとせいし
くれば。中将のきうどは。寺へそいでいざりよ
まゐり。姫君うちころより心まどひして。袖もしぼ
られば。さむらへるぞかりつく秋のさし月も
へだてられど。おりしもあらずおさへて。さしも
きこえけるかたりもさりし人の。おもかげもりきろ
まで。嫁なげつせぬなる姫君の心のうち。さぞ我
ゆへなるらんとつくえぐるしく覚えしおもはれて。
いらじうなる紀様。うこんもよそまでさやりきて
つかなりさい地の数なるずらてまつりまめもくれ
とぞまそての今一しや洞なかげ道ねかうり。いと久

しくありぬれど。ふびまうち出給ことの葉を
あま君からうちそへてこあひつ。いまでうくある（浮舟詞）
よるもわかぬ夜あかしも。おもふべく侍かはかしこまる
てあん。そのまゝに命えあるまじかりば。かふいゆで見ん
なまらん。されば、いそて風のつてにもうくこそやと契める
し給はざりけるとれつゝかるしこそは。今ぞはかりける
ぬれはすゞろなきしげおぼくさえあん。かくうひあまされ
夜はみ給はなれば。つとば心ちもまどひくるしく
いひつゞそて。おしまろびあへる。ことわりはせうそこ御かた（浮舟詞）
く。ぞ涙はのこむきびてうく人もし給はずしも（浮舟）
じめかりのこと。おり夜くりしく夜深しきこと

さてこれば（尼君詞）げにつまはとろかなしぬさしじめは
こそとそておやじのあまたこいめへしあへり（浮舟）まれ
べまづうちあまきつ（詞）きてもいかよりてかれんじ
つけさせあへるまかなかれさ歳まてあちあふか
ざりけりなぞくとりとくめなせあまれかなけはばせ
一かるあるずなえさせんかくあなくあへるあど
いへば（尼君詞）もじめかりのことまかあかれどかくり出て
四五月まではうちもへうけしくざ歳ままもこて給はざり
しうはあか絃かひあかましさあめかまれゆへめのま
へあかあげさとやらさへんとぶうまへあげさ
てさ歳くわくじ果しあまれやくこてまし

なほ弥の邪慳しと悦(よろこび)給ひておけられのかれ
ごれなぐさめまゐらせてまつりあつかひなどしけれ
くまゐりあけつれども来ありとはいふのくま
も心し給はず。おりくおぼしへぞてころまそあど
こゝもつゝまし。くらましと覚しこれば志かてもと
ひそてまつることも給はで。うけりめでてうれ可さ姫
なれば。さく人まても扣し給りしと。貞ぶかりしく
さめへしもあらく。恐れてさせ給めれば。うひ
なれ可さ姫もうちさず。さめへ癡(まげき)ちくべうなすらぐ乃
給まいとくうちかなそて。(浮舟)お(詞)なじくうひなる人へあ
まうし給へれど。これはさ姫ことゝま。おろそかはりこゝろも

づらくなくて。あさ夕はいつでも人なきくまでも。こゝな
してゐれども思ひしりひなく。おすすてうらなるさ
まとゞめずなり給ふしかば。いつでもうらみれもめれまん
なりこそ世の常のなりひまで給ふ。おぼつかなさせてん
でおなげきし給ふ心の内。さぞせしちらし世のへさかりう
の心ざしをもらぬかは。おなじ世なかし思ひもく
給けらなん。げにはおやのせうくちしづまるをよこ
そ給へれとつらう根めしくおもひ給ふらく。ちらなくさ男
まていぬとまひとひきてのぶもこともりなれど。おな
おくいかくぬきなるまじかりと。口おしくなきん。さ
れどいさく一すぢはなきさ人とのゑ思ひしもかくて

しのはゝ二人ひめしめの悦ばかりけも
なかにとなぐさみなかなかとりぐさきめへだしげに
いりむかりうとあまだもあさきみて犬ゆくのうち尾宍詞
はしやぶそ後もおけくれ抱きあんおばしむきそ
ばられてだれまあくあやこひくり給つて波く
ののふことてもふぶり代もぢ民ほの我うし
給しかばつらじうあゆましこきしとまおしみ
きこえそもぐし給しなせあるべきことりや
まれしあひけん、こそもろりそめしてあるまも
あればれいのりゑもことさしもりさきまこひ
らち給しつあでま、おげうしも志のびてぞぐ

のしこゝえしかども。かれうけおはしまさ
ましかば。うしろめたからざらめれば。さこそ思し
く。まうでさぶらふなりしも。ちかうしありし
ちすまがしのおぼろ。山よりありけるはおほくの給ハ
せられば。ほうしといふなるも。おきなしうこそす
くなる人まで。ござ入そまつりけるなれ。人なく
こころそまつりしおへなさば。ざりはうちもまど
ひぜんのなく給しまばしてさそのかなしう
ぞしなりこゝあかれ。ざるをこそて給慧人もいうじ
うおきかゝれ思ひなありとこそそまつり給ゝ
ありも。お後このれおほさ徳もらちあしくこそ

なぞ増くわいひきしのふごんハこのひまより
ちくさしよりつゞきて色いろありしとよう
なぞさうあれバ凡ねがふうつとを増ばらぞ。
いらじくうりけりとて。ふしぞうちあさきの人分
分しきりとあそれなり。大さくすぎくりこまくさん
ぶるかりさ佛よ如ぬれバこゝろすくけやぐ飛ちあつね。
ましてらぶおさあさちぶこの心ち志ておしろよ心ぐ
分しこさそさへそひてさぶりこちらくりし流ぐ
しのぶらじくそがれられバめへもすぎて。いくつともを
あくりさるりらつ猶ずそのそゞめの中こいとし絶
でらうさにもとかきくしさ詞なぞらくハ如路よけむ。

ふるてまつりし世にかはりて盛なりとおもひしは心
づひ。さてもけんとはゆめまぼろしにてこそあれやはせし。
さもおもしく思ひて世話し心られ。うこえ
もおさあくまり又あくされこそことていうか
かほともせられそてまつじとおもへしうひあく。
かしこさぶる身すめさせて世話はざりしつくさ
あぐさきそて。待こそせずあさおもり。それこそやのれ
ことも加つり出て。いまじう人めこぐし。こさまでお
ぼしあげくめりしは。福かればれいのれすさど
どもこさてしはかさへこそおされは侍れ。かく無なく
としへあくのよしはめつこさやうるこし世話しかども。さ

すつるゝなく衰におぼしへつゝうこえなどまで
雅やかなるまへおふもそれれゆゝりとおぼしぶめる
こそかくうしげなくゝみてまつり侍のどやうなるか
物りなくちうくめしつきそ、づきあれことのみん
の後生つおぼしを世には、おぼつなりつあれはこそ
若しけめども、人はなく心なずくやいかゞいつとても
心のいろはおなじことなれど、なりにまじこき方
のくせいでるなくあそ紀りてまのゝなん人めには
さしけり。今はいとゞひなしや、それかことしもんづ
うへきこしなりまぼろしもあしゞばかりとも衰とはお
ぼしなんしなど、かゝりけを後切りく侍りつまもげま

こそおそれはこそでまいり給ぬれあどぞうこうさ
しかれば。おそれはもとろづしうも。さ無くうきこうぶ
あまつさへげうつし心のいろうきはさしそとこさく
給は。お浄あやしや。めれまへの喪はあしきれうて
まいりてずうしもあびきえん心がろきのこぞいは
んうるあくうりけうじやそも此世ひとつの
むろひあしじ。人とばあはかうしとむきぬてん。力
のあそくちくさすしかべき験までこそざうこぶれ
もありけめとむはばうぶのがれがらさ力のうさ
ぞ世々のむろひもうちかしくむちられ給けり。
さてもひろみすし安はあまき抱とらひまで名れ。みるい

の人にあひむかひて文立かへりその世のありさま
なつかしさハ身がらちかどの心ちしてめづらかにおもハ
れにもいくばくのほしげなん．おもかげ限りハさすがかく
誰にもやうくおもひかへせ今ハと妹し夕まで心ぐ
あうせをさしめれどもさらにえずなくなりなん
命のほどもおそれにおもしくぞ悲しけりまゝらう
ともこゝろひとまりぬれバおもはず君のこゝよりゆへ
あかひまりごやうの趣こゝやこゝにはめぐれぬらぐ趣
おどおもし二三度はさりなしてこゝよりてまへま
つりめへりうちもまどろますづきぬまれがくり
まおぼつき夜もなほなほずおけぬれどもかへりなん

とゞこほりおもはずみゆる所のをりふしさもおほか
じらまほしけれ。おぼつかなきふみへいでゝけふしはべ
らん。昔のゆめのけしきうちつくろひてあへらし。おやしのやどり
おぼしめすや。ふみはいとひろくはれがきりめぐらさす
まつころをおもしてけふしこそんとわかひはべ
さ。あはれ夜のいさめじうあらかべくのすへばそれもいつ
とゞかぬれまいるもおもかうへのたよべく。さて
こそいとゞあつかはずおすくこそも。うかうまじ
のこしやといふさく候なずうちかさなりて。いは
かされいげ中くなりなべくされども、うつしさまうつし
まへいかゞとぞうるさくぬべくさし山の名くもぞまうく

出て人めしげきすまひいふぞかんといひまぎら
はしてうちそむきぬるをそしあらひしらず
物しげなる紙に（浮舟心）いとゞしくなりとなり（詞）やこ
とてもなみだこれこそ人めしげゝれ待らんどもゝう
山里びてれくらせ侍べきなどれ心はつくさ侮は
ききしなみすも哀なり。さ侮ぐなうこそあわれなど
おほせられけりつゞらりけり。（浮）姫君のれ思ひいはさう
まもいはず。尼君にも一所をさきまでなりけれど。
又なまさ男なよろこびさはぎて。抱さびしき尼
君どもなどめさめらる心ちなんしげりうらんよや
ぐて立とまつしまはしくやひこれども。（浮詞）けしきり

心ぼそきすまゐなれども、いかにしてもそ
ぐさん。いとあるまじきことのかなひて
かゝる世をそむきはつる山のおくにすむ
なれこそ袖ぬらすらん。どのかへだし
立入るあづかりぶぎやうくらうどころなるあづかりき
きられとおもひはしかども、ことさらそていかうじうやくの。
たちがしころそのおくりの山さへ、みすてまじとおもふ
あらまほしまは、いとゞ心ぼそくて、しころも文あつかり
うれしくて、おすゞめのふまかゞりしに、浮世ハ例のごや
のさこあひに心入れべし。うらんハそれられに
へまいりられしも、れいかりもへずくあるはしめやう

りてだらしつゝこはこゝまでまさらそで、ふえふきすき
ひつおりしまゝす程ありけるが、ぶちと無て地いふ
けちひをとこつけめて、とりつきめし出て、いふ
まあさとひめへば、おりつる藤あきうしぞこゝて
あまりて、みちのまよひにそことの給ひつる、口ずさみこそ
もろくり里ゆれば、げにさぞやうんとおもはれてう
ち涸ぐまれ給。中〳〵うちもらぬ藤あきうしがりちらりも
物ぐしぜやあさん。今いひとあそれは心ぐるしき
うらそひて、流心まくらぬおりあるりうこまう
ちうちはおりぐとま。さゞりあるへもおりぐくりめり
せと。笑し出ることいふことはれぞ。そのすぢゞりのことい

けてもありしおんちやうあいされ給し。家の君は
も猶あくかるゝひよりあまて例のちぎりしは栄やうは
栄しくらしか共。今はさしもおもわぬや。毎いの御方
そば猶つきをずおそれあるべくは栄しられむ。
世人も心よくてもてなし。ちね君の御心ちのひも古紙
さえまさりむしはくらう給ぬを。おりがらくさ
ばしらるれうり家の物のけすけ給まうでり。い
うじくきうしうおりしまず紙おまくあまんざ
日猶あべてはさこそしぬべうもおりしまさぬを。
猶されどかうはいうらくざひあり化を。うじうお
ばしられだり事を代もしげありれなどきこさいの家

なにゆゑしかせんどれ文の中抱さぢらく
ありてまいらせさせてまゐり給はぬなるべし。まこと
やよねぞ花はありめて。内大臣けめんなれどい
とふひらそひらう心ちすらは。色まもしろうよう。
又れいなりずなやましう給ひしを。中めれとる
ちなどこゝろてまゐり志つるにあらで。男君はよく
とこそきゝたれば。さうぐしうつるはずらしいう
れしと覚しそり。母君などさくさてしうちもいはず
おはしよろこびてれいのりどもなすはうといつまよ
まうゐるし。ぞのまいらぶつきをぬなすめりまで。冬とは
もありまゐりごやこぶるゆゑとあるれがちなれど

ましていとゞあくがれけぬがよは文なりそひ
ついゐる人ゝ下はうづもるゝ。これのうちひぢをあが
めいでゝろ冬葉。ふしのゑあしねど。雪の人より
そうりいとゝみするはあそびく候。られやさいをとるは
こゝろし。山人のすゝやくあらんと。心ばそさい
ちんうくあし
ほ
まむ人の宿をがうづむ雪のうちはゝかぞ
こゝぬをのくすゞ風。例のうきくしくつねならも
目うずかゝろいゞいとゞつまずまろ山人の絵さん
さゑさてゝろは。あとりあくまけいうれつらひの
か川のをともめづしかそ人〳〵ましつるは

みづからはやことはづかしきこゝろのうし
ちるはいとゞややきこえてなん
いかゞはあすばらぶんききて雪ふること
のその山べにけなかりきへかへる切りかへしも哀なるひ
ちゞられはずみし心とゞめて
ながらこそ詠せばこれ白雪のふり埋こころ岩
の通路ぞちかひけりまつなかの哀いとど哀と涙ぐまれ
て打ながめてこゝろねかへりぞてもこれをいりなして
なき後し心づくしのこといひなびし出なくて
色なしなづきあはもいかゞはなるまさるゝなりてあへき
まじきこ哀人ちげきすまひいづれもよしふめ

をげなき人もたゞゆるしあべかりしいひけるは
末世のことゝもてこそ、みだしぬ事に侍り
しが今さらしもそいでありし、人のあはれひとつ
さりとおやしうちあん、さりとてこれ山ふかきを
まねまばらにあきてあんも心ぐるしきこと。いふは
せましがらきわかりの山ざとに住さるべくさもあし
て、無つくわらしてんなど心ひとつに苦しまうけなど
ら、女房のわれともに住、されもく文なきにとせてこそ
うきわれいのりども、おくかりくさるべきけいしなど、
心のいと後あるころあれが、おりふしあしらそていとく
されとも世のなごとゝしきゝくやらなど、苦し

やまふかそ粧こりず無ねられ心のどけきあれ。営
りうしのあそびちまは。いづくまでもあれさいがし
うすざらりしさころあれど。けれ心ひとりてい
とのどかにて山里べまでも趣けるにぬほど
まじとしづれ絡て。甚をむかべきこころまうけの
物どもし。無ぐこちくてうんがころたくひの
無まで。無まで趣しやすられバれいのけざ
やるるぬあまた思ちの心どもまけ。雪あられを
まけされつひのおりれあつおりかしをすぐ
し絡さぬうちも。これをかくされころざしのたつ
しるといふも。さうじにいかもしいとくこそつく

しとせめへり。母君の許よりも。よろづにむいひこし

ぬ。ことなくて。おまへ君のかくまでとふひこしぬ

れども。まめやかなるすがる身のことまにうけ

のこちびさせめへりなりけりとせ悦びのふましてそうなる

すゞろひなど。いひけれ（浮）どのれどくとりひたそ。まめ

にも出入ならやぬやとさけるのどやうなる夕つゝ

（素）きぬ衣は。（白）紅つゝの衣にまいりなられども。こやいなど

いまなん。六条院にひまりへまへ家となきとも。

ふ（中）いのかくへまいりなへれば。いの心よくこそ行に

うちそゝのめきそ。（詞）ほとかしくれば。さこそその

御のないげに。いろいろもなくされにけるに。やゝし

月のかつらはいとこそうつくしかれとうちながめさせ給
へるを、うへおんとこきゝつべし。中将が声にて。
うちとけぬ人のあやまちは。おぼしめしとがめ
ぞいかひなるまじ。されどかうまれをのがるゝえ
しのびやかにきこえてとぞ。もやのうちにおろして入
なかうどもしらであり。つれいましめらんごとも
女はあさましとやゞそくゆりぬるあまくぞこうしうち
わびのへうつゝをすあまめしとげりありて。女
まかり出のふかしきあれば。ねあそりねてぐ
いましも出させ給けり。日かしうおもへあながちなる
とや。あさましくしさ人のいふちなるがしのうきさかの

こいめんもこ海ちくまはさく作りつくれども世にこ
おり嬉しくなどこそてめへるげまとぢめもて
めりのくりなきも心ばそうとぢりはのくりま
ぎうりしかへる。慈心さ海はきうかりげありけ有は
つまり地のもてをこうずずかまどをくりむかと
いそぐあるひこそもかれとてきめやうなうり
ねなつれいのむかし今の代地候こまやうなこと
えぬふなるとかれどのすまおいれもし給はず。
さういともまことておもめべき人のうへなり候。
及りてもひ出ずば涙まことおそへぞそくりと
此ほさんらうしかれどもちくあり了行のおわり

海のおやしきをなれづゝくれなゐのゝめど
ちゝぞがまゝておしめへぐ我も又こゝてまく
こゝとおぢつまゝる心ちしてまほなしでうさ
かしなくこそなされとこゝて出んもうつき
くなき心ちすべしうちさゝ結りん人志なれ
めはぶんべきことの海をもわるゝばうらしこさ
こゝそめていのこりなうこそなしめぶのぶりうし
まこゝてうらしこれうりをもわふなきさうこし
なけれど父のわおくりをそ我とさぶりうひ
出んこゝまぞぶしをのづゝ地のかれなくてほの
こゝ人もおへばなどロをまきこゝちを男まる

山三十九緒

よしその恨のある程とけぬなるべし